

# ロールシャッハ法における父親イメージカード選択過程の検討

## —青年期女性の父親イメージに着目して—

石井 佳葉

### I. 問題と目的

ロールシャッハ法は、10枚の刺激図版に対する反応から被検者のパーソナリティを理解する手法であり、臨床場面においてよく用いられる検査法の一つである。片口法（片口, 1980）では、自由反応段階、質問段階の後に、検査者の判断によって実施される限界吟味段階が設けられている。この段階の施行法はまだ確立されているとは言えず、本研究ではこの段階で実施されるイメージカード選択（以下、IC選択）に着目する。これは、10枚の刺激図版の中から、Most Like, Most Dislike, Father, Mother, Selfなどのイメージに合うものを選択してもらう手続きであり、選択されたカードの反応内容や選択理由から内的なイメージを理解することができると考えられている。この手法を用いた事例研究として、井原（1983）は交換ロールシャッハ法とIC選択によって家族内の力動を捉えており、村上（1957）も非行少年と健常少年の両親イメージについて、父親および母親イメージカード（以下、FIC, MIC）とそこに付された感情価をもとに検討を行っている。

また、IC選択は「父親・母親イメージカード解釈仮説」の妥当性を検証する研究においても用いられてきた（Meer&Singer, 1950; Rosen, 1951 など）。この仮説は、Bochner&Halpern（1945）によって提唱され、IVカードを父親に、VIIカードを母親に関連付けて、父親や母親に対する態度、あるいは権威像や女性像に対する態度が表現されると解釈するものである（福井ら, 2011）。解釈仮説の妥当性の検証においては、当該カードが父親、母親イメージとして他のカード以上に際立って選ばれやすいかどうかの問題とされている（田中, 1984）。本邦では、福井ら（2011）、坪井ら（2012）、三浦・柴原（2015）の研究において、父親イメージとしてIVカードが選択されやすいことが確認され、FIC仮説のみ支持されている。こうした研究結果と関連して、ロールシャッハ法を用いた事例検討においても、IVカードが「父親カード」あるいは「男性カード」であることを踏まえて解釈が行われている（星野, 1993; 西尾, 2015）。

一方で、FIC解釈仮説について、解釈を限定しすぎること（馬場, 2002）や父親との関係以外の経験からも生じうること（Schachtel, 1966）など慎重な意見も見受けられる。IC選択との関連からは、田中（1984）が指摘するように、IVカードが選択されやすいことが確かめられたとしても、カードに与えられた反応から父親に対する情報を導き出せる、ということにはな

らない。しかし、やはりIVカードがFICとして選ばれやすいという事実を目を向けると、IVカードが見る人の父親イメージを喚起する「何か」を備えている可能性があると考えられる。解釈仮説への批判が論じられる背景には、FICとしてIVカードが選択されるかどうか、反応内容は何であったか、という選択結果のみが取り上げられて検討されてきたことも影響しているのではないだろうか。

そもそも、FIC選択においては父親イメージを想起し、10枚の図版からそれに合うものを選び取り、その理由を説明するという一連の過程が存在する。対象者の内的理解を主眼とした先行研究においてはこの過程を考慮に入れつつも、やはりどのカードが選択されたか、選択理由は何であったかの把握に留まっていると考えられる。中年期女性の不安を扱った星野（1993）の研究では父親の印象や「怪獣」の反応から、父親イメージについて「脅威的で原始的な対象像」と解釈されている。鈴木・高橋（2005）の女性性受容に関する研究においても、イメージカードの反応内容と端的な選択理由について肯定―否定という軸で考察が行われている。IC選択の結果から得られる情報も多いが、選択の過程を捉えることでイメージのより深い理解が可能になると思われる。しかし、今のところ選択過程を扱った研究は見られない。

そこで、本研究においては、IVカードと父親イメージの検討に先立ち、IVカードを含めたFIC選択の過程に着目する。FIC選択過程の分析から探索的にいくつかのパターンを見出すことで、選択の結果だけではなく過程を検討することの意義を実証的に示すことを目指す。なお、本研究においては、FIC選択のパターンを浮彫りにするため、対象者の性別や発達段階などを限定する必要があると考えられた。特に、複数の選択パターンを抽出するにあたり、多様な父親イメージを抱く対象群が適当であると判断した。そこで、性別に関して本研究では女性を取り上げることとした。父親と女性、すなわち父―娘関係では、異性であることや母子のような身体的繋がりが希薄であることから、家族関係において最も遠い位置づけにあると言える。また、一口に女性からみた父親イメージと言っても、発達段階によってその質は異なるものと推察される。青年期は第二の分離・個体化（Blos, 1967）と呼ばれるように、父親を含めた両親から分離し、家族以外の対人関係を築いていくという課題を抱えている。小野寺（1984）は、父娘関係について「幼女と父親から、結婚した娘と実家の父親の関係に至るまで様々であるが、実際に異性と交際する機会が多く、配偶者選択を行う青年後期の女性の父親に対する態度に最も個人差が多くみられ」るだろうと指摘している。また、父親イメージについての先行研究では、厳しい・父性的な父親のイメージから、女性の就労増加など社会的な変化に伴って、より優しく、家庭的なものに変化してきたことが論じられている（小野寺, 1984；神谷・郭, 1995）。最近では、父親を含めた親への反抗期が見られないという報告もなされており（溝上, 2011）、青年期女性の抱く父親イメージは社会的な変化や発達段階の影響を受け、多種多様なものとなっていると考えられる。

以上より、本研究ではFIC選択の過程におけるパターンを探索的に示し、過程を分析することの意義を実証的に示すことを目的とする。青年期女性を対象とすることで、父親イメージめぐって様々な反応が得られると予想され、選択の過程を検討するのに適していると考えられた。まず、質問紙から意識的な父親イメージを捉え、続いてFIC選択の過程について、反応内容だけではなく、どのように選択され（選択時間）、どのように語られるか（語りの展開）、と

いう質的な側面に着目する。このように、FIC 選択過程の分析から得られたパターンを示すことで、選択結果だけでは捉えきれなかった側面について理解することが可能になると推測される。こうしたアプローチは、ロールシャッハ法におけるイメージカードの臨床的な活用に繋がると考えられ、クライアントの父親イメージ、内面世界の理解において意義深いと言える。

## II. 方法

### 調査 1

**対象者：**女子大学生 175 名（平均年齢 19.0 歳，SD=1.0）。

**調査内容：**神谷・郭（1995）による「父親像尺度」20 項目を講義終了後に集団で実施した。

**分析方法：**因子分析の後、クラスター分析（ユークリッド平方距離，Ward 法）を行った。

### 調査 2

**対象者：**調査 1 の結果にもとづいて、ロールシャッハ・テスト（以下，ロ・テスト）の受検を依頼し，協力の得られた女子大学生 9 名（年齢は 18～22 歳，平均年齢 19.3 歳，SD=0.9）。

**調査内容：**大学構内の個室を利用し，筆者が個別にロ・テスト（片口法）を施行した。限界吟味段階において 10 枚のカードの中から，MIC，FIC，SIC（Self Image Card）の選択を求め，それぞれ理由を聴取した。本研究においては父親イメージに着目するため，FIC の選択理由について 20 分間聞き取りを行った。なお，対象者の承諾を得て IC レコーダーによる録音を行った。

**分析方法：**FIC における選択パターンを探索的に捉えるため，一連の選択過程を，FIC の本検査における反応内容，選択に要した時間，選択理由の語りの 3 段階に分けて分析を行った。

**倫理的配慮：**調査対象者に事前に本調査の目的を説明し，同意を得た上で実施した。また，この研究の公表にあたり，京都大学臨床心理学研究倫理審査会の承認を得た。

## III. 結果と考察

### 調査 1：娘からみた「父親像尺度」

父親像尺度（神谷・郭，1995）について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った結果，2 因子が抽出された（表 1）。神谷ら（1995）の研究においては，「大黒柱」，「頑固」，「家庭志向」の 3 因子が得られ，関連の見られた「大黒柱」と「家庭志向」を“父親的役割”と命名された。それに対し，本研究では「大黒柱」と「家庭志向」の融合したものが一つの因子として抽出されたため，これら 11 項目（ $\alpha=.876$ ）を“父親的役割”とした。このことから，現代において父親は「大黒柱」的な役割に加えて「家庭志向」的な側面も求められるようになっており，こうした父親の役割観がより定着してきたと言えるだろう。

また，残り 4 項目（ $\alpha=.834$ ）に

表 1 父親像尺度の因子分析結果

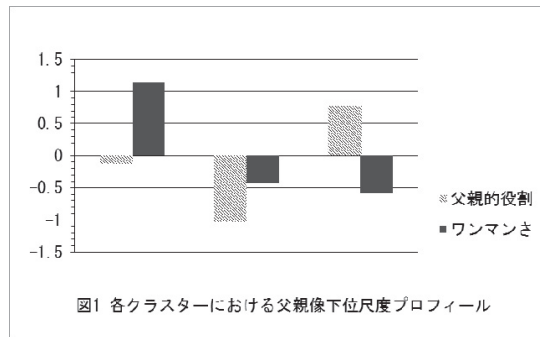
| 項目                      | 因子1   | 因子2   |
|-------------------------|-------|-------|
| Q3 父親は家庭を大切にする          | .844  | -.016 |
| Q6 父親は妻(あなたの母親)を大切にしている | .754  | -.124 |
| Q5※ 父親は家では邪魔者扱いされている    | .732  | .084  |
| Q13※ 父親は家では影の薄い存在である    | .716  | .264  |
| Q12 父親は一家の大黒柱である        | .702  | .312  |
| Q4 父親はあなたを理解している        | .690  | -.178 |
| Q15 父親は休日に家庭サービスをする     | .651  | -.058 |
| Q9 父親はあなたを愛している         | .620  | .033  |
| Q14 父親はあなたを信頼している       | .614  | -.300 |
| Q8※ 父親はあなたに無関心である       | .611  | .015  |
| Q7 父親は家事を手伝う            | .449  | -.210 |
| Q20 父親は恐い人である           | .034  | .851  |
| Q1 父親は厳しい人である           | .046  | .842  |
| Q18 父親は亭主関白である          | -.039 | .806  |
| Q17 父親はがんこである           | -.025 | .723  |

(注) 項目番号の後ろにある※は逆転項目を示す。

について神谷らは「頑固」としていたが、本研究においてはよりネガティブな印象を含むと考えられ、“ワンマンさ”と命名した。

“父親的役割”と“ワンマンさ”の因子得点の平均値を比較し、以下のように3群を捉えることができると考えられた(図1)。すなわち、“父親的役割”は乏しく“ワンマンさ”の見られるワンマン

な父親像群(55名)、両側面とも乏しい影の薄い父親像群(47名)、そして“父親的役割”はあるが“ワンマンさ”の見られない優しく頼れる父親像群(73名)が得られた。



## 調査2：FIC 選択

調査1で得られた3群の因子得点を標準化し、下位尺度のプロファイルの傾向に沿って並び替えた。各群の上位10%に該当する対象者のうち、協力の得られた9名にロ・テスト及びIC選択を実施した(ワンマンな父親像群；事例A～C、影の薄い父親像群；事例D～F、優しく頼れる父親像群；事例G～I)。

1. では従来のFIC選択で行われてきたように、主に反応内容から各群の父親イメージについて概観する。さらに、本研究ではFIC選択の過程を分析するため、2., 3. において、それぞれ選択時間、選択理由をめぐる語りを取り上げて検討を行う。以上を踏まえて、最後の4. ではFICの選択パターンを抽出する。

### 1. 各事例のFICと反応内容の概観

各事例のFICと反応内容を呈示する(表2)。選択されたカードの内訳は、Ⅲ, Ⅷ, Ⅸ, Xカードが各1名、Ⅳカードが5名であった。本研究では、FIC選択の過程の分析を目的としているため、詳細な検討を行わないが、解釈仮説の通り、FICとしてⅣカードが選択されやすいことがうかがわ

表2 各群における父親イメージカードの反応内容

| 群          | 事例 | 図版 | 自由反応段階                                    | 質問段階                                                                                                                  |
|------------|----|----|-------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ワンマンな父親像群  | A  | Ⅲ  | ①虫<br>②リボン                                | ①顔がカマキリ系で、胴体はコガネムシ。<br>②脊椎っぽいと思った。真ん中留めているからリボン。色的にも。                                                                 |
|            | B  | Ⅳ  | ①クマ<br>②ドラゴン<br>③巨人<br>④ジャングル             | ①でかい。下から見上げる。<br>②飛んでいるのを上から見ている。<br>③鎧と仮面をつけている。下から見上げる。<br>④空の上から見た。木の広がり。                                          |
|            | C  | Ⅳ  | ①怪物<br>②山の向こうの塔<br>③ニワトリ                  | ①下から見ている。踏みつけてきそう。<br>②遠近法。山は氷山。<br>③ニワトリ界の王様。                                                                        |
| 影の薄い父親像群   | D  | X  | ①顔                                        | ①眉毛が吊り上って怒っている？でもお婆ちゃんみたいな眼鏡をかけている。                                                                                   |
|            | E  | Ⅸ  | ①ドレス<br>②エビ<br>③群馬県<br>④ウサギ               | ①形ときれいな色。<br>②オレンジと細い線から。<br>③形。<br>④形と牙。ドレス着ている、気持ち悪い。                                                               |
|            | F  | Ⅳ  | ①木                                        | ①すごい大きい木。うっそうとしたジャングル                                                                                                 |
| 優しく頼れる父親像群 | G  | Ⅳ  | ①毛皮<br>②カバの顔<br>③コート着た人<br>④ドラゴン<br>⑤魔界の城 | ①トラ…ではなくいい絨毯。つやが出ている。<br>②幼いから、可愛い。大人は怖い。<br>③濃淡からコート。(顔への)光の当たり方が明るいから怖くない。<br>④形。羽は風になびいている。<br>⑤黒色と濃淡から、霧の中にそびえたつ。 |
|            | H  | Ⅷ  | ①ネコ<br>②崖を上る動物                            | ①水面に映っている。歩いているところ。<br>②ゴツゴツした崖をちよつとずつ登っている。                                                                          |
|            | I  | Ⅳ  | ①ソウ                                       | ①顔を近づけてきている。でこぼこした輪郭から栄養状態大丈夫かな。                                                                                      |

れた。

反応内容について、ワンマンな父親像群では、「虫（顔がカマキリ、胴体はコガネムシ）」、「ドラゴン」「巨人」、「怪獣」など、全体的に現実味の乏しい反応内容が得られた。嫌悪感や恐怖感がうかがわれ、意識的に抱いているイメージと同様に、父親に対して否定的な印象を抱いている可能性が考えられた。優しく頼れる父親像群では、「毛皮」「コートを着た人」、「ネコ」、「ゾウ」など人間や動物に関連した反応がみられた。「つや」「ゴツゴツ」「でこぼこ」など、反応内容の質感に言及されており、接触感を伴っていることも特徴的であった。こうした点から、父親イメージは対象者にとって心理的に距離の近いものであると考えられた。反応内容の一部からは、弱々しさや暗い反応も見られたが、全体的に父親は娘を脅かすような存在ではないと推察された。影の薄い父親像群では、様々な反応内容が示されたため、個別に見ていくこととする。事例Dの「顔（怒っている?）」から、父親に対する恐怖心が読み取れる一方で、「おばあちゃんみたいな眼鏡」からはあたたかいイメージもうかがわれた。また、事例Eのポジティブな女性イメージを連想させる反応（ドレス）が、ネガティブな反応（牙のあるウサギ）と混交し、「気持ち悪い」状態に陥ってしまった。このことから、父親イメージと女性性には何かしらの関連性があるように思われた。事例Fで「木」の大きさが強調され、偉大さや脅威が感じられた。一方で、「ジャングル」の拡散した反応内容からは、父親イメージの曖昧さや不安定さも連想された。

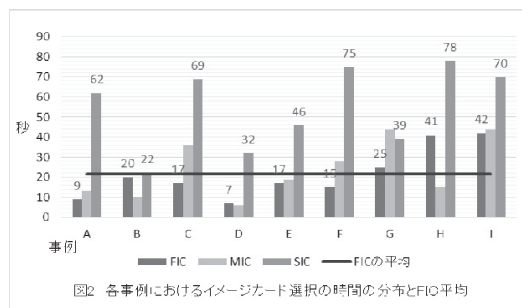
以上より、FICの反応内容をもとに対象者の父親イメージについて概観したところ、ワンマンな父親像群、優しく頼れる父親像群では、意識的に抱いているイメージとおおむね一致したFICが選択されたようであった。影の薄い父親像群の3事例では反応内容にばらつきが見られたが、いずれも父親イメージにまつわる複雑な感情がうかがわれた。

## 2. 各事例のイメージカードの選択時間の検討

選択時の反応を示す指標として、本研究では選択時間の計測を行った。全体での平均（SD）は、FICが21.4秒（11.9）、MICが23.9秒（13.8）、SICが54.8秒（19.3）となった。

FICに着目すると、優しく頼れる父親像群（事例G・H・I）のみ全体におけるFICの平均選択時間（21.4秒）を超えていた。防衛解釈の側面からは、反応時間の遅れについて「一時的な抑圧の動揺と不安が推測されるが、本人には不安感情は明確に意識されず、態度や言葉に表現されないことが多い」（小此木・馬場、1989）とされている。これはロ・テストにおける反応に關しての指摘であるが、FIC選択においても同様に考えられるのではないだろうか。この群は肯定的なイメージを示しており、選択時にネガティブなエピソードや不安感情が喚起されたとしても、決定の段階において回避されたのかもしれない。そして、結果として意識的に抱いているイメージに合うものが選択された可能性も考えられるだろう。

また、個人内のイメージカードの選択時間を比較すると、9事例中6事例において、特にSICと比べてFICの選択時間が短くなっていることがうかがわれた。



ロ・テストの反応において反応時間の短さは「不安にもとづく強迫性や、非協力的な態度（高橋・北村，1981）」を示すと考えられているように，青年期女性にとって，FIC の選択は SIC よりも不快な感情が高まる可能性が示唆された。

### 3. 各事例の FIC 選択理由をめぐる語りの検討

FIC の選択理由をめぐる語りをもとに，対象者がどのように父親イメージを想起し，どのように FIC の選択に至ったかについて検討を行う。なお，対象者の語りのうち，選択されたカードの反応内容を直接示す部分には\_\_，間接的に示す部分には\_\_を記した。

事例 A（ワンマンな父親像群）は FIC としてⅢカードを選択し，反応内容は「虫；顔がカマキリで，胴体はコガネムシ（黒色部分）」「リボン；脊椎ぼいと思ったけど，形と色からリボン（赤色部分）」であった。選択理由では，「父親のせいで家がめちゃくちゃ」「黒と赤の組み合わせにいいイメージがない」とプロットの赤色から受ける生々しい嫌悪感が，父親への否定的感情と結びつけられていた。MIC, SIC と比べて最もはやく FIC を選択しており（9 秒），父親への否定的な感情が強く意識されていることがうかがわれた。父親のネグレクトに近い具体的なエピソードを一通り説明した後，「昔はよかった。180 度印象が変わった」と子ども時代の父親とのあたたかい思い出がぼつりぼつりと語られた。不安を喚起する不快なⅢカードを前にして語るうちに，父親から愛情を受けていたことも想起され，否定的な父親イメージに揺らぎが生じたようであった。最後に反応内容の「虫」について，「この姿は捕食のイメージ」と述べて顔を歪ませており，父親に対する肯定的な感情は受け入れがたいものであると推察された。

事例 B（ワンマンな父親像群）は FIC としてⅣカードを選択し，「クマ；下から見上げる感じ，ドラゴン；飛んでいるのを上から見ている，巨人；下から見上げる感じ，ジャングル；空の上から見た」の 4 つの反応がみられた。選択理由について「見下ろしている感じ。態度はでかいけど，どこか臆病」と説明された。家庭の中で自己中心的に振る舞う父親への否定的な感情がうかがわれる一方で，「ついてこいと言われて，二人でご飯に行くこともある」，父親の趣味，自営業の様子などが語られた。臆病で自己中心的な父親を情けないと感じる一方で，仕事人としての尊敬から父親を大きく感じるなど，父親に対する視点が不安定に揺れ動いている可能性がうかがわれた。こうした不安定さは，Ⅳカードにおいて繰り返されていた「見上げる」「見下ろす（上から見る）」といった視点の定まらなさと同様の関係にあると考えられるかもしれない。

事例 C（ワンマンな父親像群）は FIC としてⅣカードを選択し，「怪獣；踏みつけてきそう，山の向こうの塔；氷山で隠れ家のような塔，鶏の王様；口ばしととさかと王冠」の 3 つの反応が得られた。事例 A と同様に，FIC について MIC, SIC と比較して最もはやく選択しており（17 秒），本人の中で父親イメージは否定的なものとして定まっていると考えられた。しかし，選択理由では，「偉そうで，体型もどっしりしている。いいイメージはない」と説明し，特に反応内容には触れられなかった。父親とは数年前から別居しているが，父親がすでに自分の顔を覚えていないこと，病死した母親に無関心であるなど詳細なエピソードが淡々と語られた。壮絶な体験をしているにもかかわらず，筆者に父親に対する怒りや悲しみがほとんど感じられず，情緒的な部分は解離されているように思われた。「踏みつけてきそう」というように，直接的に攻撃してくるカードを選択しており，怖れや不安を抱いている可能性がある。しかし，語りは父親とのエピソードの説明に終始しており，事例 C にとって父親に対する否定的なイメージや感

情に直接触れていくことは非常に抵抗が伴う作業であると推察された。

事例D（影の薄い父親像群）は、FICとしてXカードを選択した。「顔；怒っている？でもお婆ちゃんみたいな眼鏡をかけている」という反応であり、理由については「いかつい顔のイメージで、男っぽい感じ」と説明された。9名の中でも最も早くFICを選択しており（7秒）、外見の男らしさが反応内容の「顔」とすぐに結びついたと推察された。説明の中で、兄弟と自分への父親の態度の違い、父親の単身赴任先で二人暮らしをしていた時のネガティブな思い出、そして最後に事例D自身が父親の寛容さに気づいたエピソードが語られた。事例Dにとっては父親の「いかつい」「男らしい」外見からのイメージのみが意識されているが、反応内容における「お婆ちゃんみたいな眼鏡」のように、母性的に包み込むような寛容さのイメージも抱えていることがうかがわれた。直感的にXカードが選択されたものの、選択されたカードを眺めながら語るうちに、父親に関する様々な側面があらわれてきたようであった。このことから、本人にははっきり意識されていないが、FIC選択の時点においてXカードに惹かれるものがあったのかもしれない。

事例E（影の薄い父親像群）はFICとしてIXカードを選択した。反応内容は「ドレス；形と綺麗な色、海老；色と細い線、群馬県；形、気持ち悪いウサギ；緑色で気持ち悪い」の4つであった。理由では、「オレンジ色のあたたかい感じと、最近嫌やなと思う部分があつて...それが緑色」というように、プロットの色彩刺激に父親への感情を重ねて選択したことがうかがわれた。自分を気遣ってくれる、家族旅行に連れて行ってくれるなど、父親とのあたたかいエピソードと、電気を消さない、ゴミを捨てないなどの日常生活におけるが嫌な部分について語られた。最後に、「一般的に父親といわれれば威厳があつて強いって思うけれど、自分の父親は優しいほう。威厳があればⅧカードを選んだ」と述べた。実際に選択されたIXカードでは「ドレス」の反応を2つ示しており、女性的なイメージがうかがわれた。事例Eは父親の優しさに対して、愛情のようなあたたかいものを感じ取っている一方で、「威厳」が感じられないために複雑な感情を抱いていると推察された。こうした父親に対する両価的な感情が、イメージカードにおける色彩刺激と結びついて選択されたと言える。

事例F（ワンマンな父親像群）はFICとしてIVカードを選択した。「木；大きい木。うっそうとしたジャングル」であり、理由について「真面目。けっこうぶれないというか、筋が通っているので木と言った」と反応内容と直接結びつけた。実際の語りでは、父親の「ぶれない」と感じられる部分よりも、父親の仕事や二人でよく遊びに行くことが中心となっていた。気分によって変動の激しい母親よりも、「どっしりしている」父親の方が「落ち着く」と述べており、父親との関係性の方が良好であるように思われた。一方、両親の夫婦関係は冷めているようであり、「私もお父さんと合わないところがある」と母親よりの発言を付け加えた。意識的には肯定的なイメージを抱いているようであるが、両親の関係性の影響を受けて、複雑な感情が渦巻いている可能性がうかがわれた。IVカードの反応とあわせて考えると、選択理由において「木」のまっすぐさには触れられたが、「ジャングル」のやや拡散したイメージについては全く言及されておらず、こうした複雑な感情と関連しているのかもしれない。

事例G（優しく頼れる父親像群）は、FICとしてIVカードを選択した。「毛皮；トラ…ではなくいい絨毯、カバの顔；幼いからかわいい、コートを着た人；光の当たり方が明るいから怖く

ない、ドラゴン；羽が風になびいている、魔界の城；霧の中にそびえたつ」と濃淡刺激を用いた5つの反応が見られ、いずれも不安感情がうかがわれた。しかし、選択理由では「とても優しいし、家族思いでいいイメージ。怖いものも見えたけれど、良いイメージが大きい。完璧な父親」と非常に肯定的に語られた。具体的な反応内容に触れられることはなく、家族のことを第一に考える父親の行動について、様々なエピソードが説明された。「怖いもの」ばかりが見えたカードであるように思われるが、事例Gにとっては父親の良いイメージのみが意識化されており、ネガティブな要素は全て切り捨てられている可能性がうかがわれた。

事例H（優しく頼れる父親像群）は、FICとしてⅧカードを選択した。選択時間について、MICと比較するとFICでは26秒程度長くなっており、また全体平均からも20秒ほど遅れがみられた。FICのⅧカードでは、「ネコ；歩いている、崖を上る動物；崖をちょっとずつ上っている」と平凡反応であった。選択理由については、「コツコツ上っているところと、父親の頑張っているところが重なる」「父はネコが好き」というように、反応内容および決定因（FM）と直接的に結びつけられていた。「愚痴を言っているのを聞いたことがない」「怒られたこともない」「なよなよしているわけではない」など、父親に関する語りは不明瞭であり、選択に時間を要したことも踏まえると、事例Hの内的な父親イメージは非常に曖昧なものである可能性が推察された。

事例I（優しく頼れる父親像群）はFICとしてⅣカードを選択した。「ゾウ；顔を近づけている。栄養状態大丈夫かな」の反応であり、理由について「頼れる感じ。近づけているのと、気にかけてくれている感じが重なるから」と反応内容および決定因（FM）と直接的に結び付けて説明された。関心を向けてくれる行動には注目されていたが、反応内容の「栄養状態」が心配なゾウのイメージには触れられることはなく、対象そのものの弱弱しさや頼りなさは事例Iの中では切り捨てられているのかもしれない。また、選択理由では家族全体についての話が中心となっており、父親イメージについては語りにくいようであった。事例Hと同様に、9名の平均選択時間と比較するとより長い時間をかけてFICを選択しており（42秒）、内的な父親イメージを深めていくことに抵抗を感じていたのかもしれない。

#### 4. FIC選択のパターンについての検討

9事例についてFICに与えられた反応内容、選択時間、そして選択理由における語りを3.でまとめた。FICの選択理由に関して、反応内容について言及するかどうか、またどのように言及するのかに着目すると、いくつかのパターンに分けることができると考えられた（図3）。

##### (1) 反応内容への言及なし（事例C・G）

事例C（ワンマンな父親像群）、事例G（優しく頼れる父親像群）では、FICの具体的な反応内容に一切触れないまま、自分の内的な父親イメージについて語っていると判断された。事例Cでは「どっしりしている」ことが述べられ、反応内容の「怪獣」や「鶏

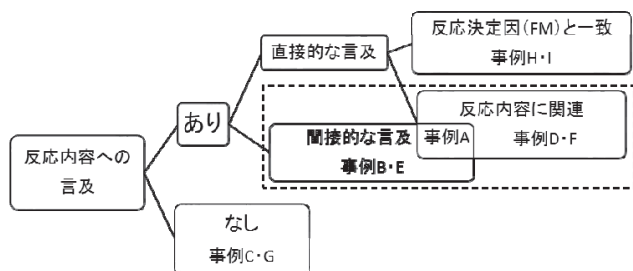


図3 FIC選択理由における反応内容への言及をもとにした事例の振分け

の王様」とも関連している可能性が考えられた。しかし、そのカードを選択した理由の説明は

ほとんど語られず、3.において示したように父親との実際のエピソードばかりが語られていたのが特徴的であった。また、事例Gにおいても「怖いものも見えた」と反応内容について示唆しているような発言が見られたが、いかに父親が完璧かについて具体的な行動の説明が続いた。この2事例に共通する特徴として、それぞれの父親イメージの質（否定的／肯定的）は異なるものの、具体的な行動の報告が中心となっていることが挙げられる。そして、その行動からうかがわれる父親イメージが、反応内容に示された感情とずれているという不自然さも見受けられた。事例Gでは非常にポジティブな父親の行動が語られ、反応内容の「毛皮」「城」には感情カテゴリー（名古屋大学式技法）でいえば、「Dependency」のスコアがつく。しかし、すべての反応に「Anxiety」がスコアされると考えられ、このカードはポジティブな感情で満たされた図版とは言い難い。また、事例Cにおいてもネガティブで信用できない父親のイメージとして選択されたカードでは、「塔」「王様」について、先のカテゴリーでいうと父性的なものに対する「Dependency」がスコアされる。しかし、説明ではこうした側面には一切触れられず、それぞれの固定化したイメージに沿って語られた。このことから、反応内容を含めたFICにおける反応全般に対する言及は避けられ、意識的に抱えているイメージを固定化させて選択を行ったものと考えられた。

## (2) FICの反応決定因との一致（事例H・I）

上記とは対照的に、事例H、I（優しく頼れる父親像群）では選択理由において直接的に反応内容に言及しており、反応決定因とも一致した説明が見られた。事例Hでは「コツコツ上る」、事例Iでは「近づいている」という動物運動反応が父親の行動と重なりと説明されたが、語られるエピソードが曖昧であったり、家族の話になったりと父親イメージについてそれ以上深まりにくいように思われた。また、2.において指摘した通り、事例H、Iにおいては特に選択に時間を要しており、父親イメージの曖昧さとも関連しているのではないかと推察された。ロ・テストの解釈においても反応にかかる時間が重視されており、反応の遅れには対象者の動揺や防衛が絡んでいると考えられた。このことから、青年期女性のFIC選択のパターンの一つとして、選択に時間を要し、さらに選択したカードの内容とほとんど一致した説明に終始してイメージの広がりが見られないものがあると思われた。

## (3) 反応内容に関する直接的（事例A・D・F）／間接的（事例A・B・E）な言及

続いて、選択理由において、選択したカードにおける反応内容に直接的に言及した事例D、F（影の薄い父親像群）について取り上げる。事例Dでは「顔」の反応内容が父親の「いかつい」顔のイメージに、事例Fでは「木」のイメージが父親の真面目でぶれない所に合致しているということであった。さらに、説明を続ける中で、事例Dでは「いかつい」、粗野な父親には「意外」に思われる寛容な部分や、事例Fでは両親の夫婦関係との関連から父親に対する複雑な感情など、意識的に説明されていたイメージとは異なる部分についても語られた。対象者自身は特にFICの反応との関連性について言及していないが、寛容な部分は「お婆ちゃんみたいな眼鏡」、父親への複雑な感情は「うっそうとしたジャングル」の拡散したイメージとそれぞれ結びついていると言えるかもしれない。このように、選択理由が語られる中で現れた側面について、対象者自身にははっきり意識されていないものの、FIC選択の時点で惹かれるものがあったのではないかと推察された。以上より、事例D、FにみられたFICにおける反応や選択理由の語り

からは父親イメージの揺れ動きがうかがわれ、FIC 上には潜在的に抱いているイメージや感情も投射されている可能性が推察された。

同様の特徴が反応内容について間接的に言及した事例 B, E においてもうかがわれた。事例 B では、選択理由の語りから父親に対する尊敬と軽蔑の感情を揺れ動く両価的な感情がうかがわれ、反応内容における視点の揺れと関連しているようであった。そして、事例 E においてもプロットの色彩に父親に対する両価的な感情を投射しており、語るうちにそれが父親に求める「威厳」―「やさしさ」と関連していることが明らかとなった。そして、直接的、間接的な言及の両方が認められた事例 A では、否定的な父親イメージを抱いており、憎しみの対象として語られるうちに、父親との良い思い出が思い起こされるなどイメージに揺れが生じていた。これらの選択過程からは、FIC の反応内容を直接的または間接的に用いつつ、自分の内的な父親イメージに向き合うことができていないのではないかと推察された。なお、反応内容への言及が直接的か間接的かによる相違点は、今後サンプル数を増やして検討を重ねる中で見出されてくるものと考えられる。そのため、図 3 に示す通り、点線で囲む形式で留めることが本研究における限界と判断した。

#### IV. 総合考察

FIC 選択において、先行研究ではどのカードが選択されるのか、選択理由が肯定的か否定的かといった観点から対象者の内的なイメージが理解されてきた。しかし、こうした選択の結果のみからの理解では不十分な場合があると考えられ、本研究では FIC 選択の過程に着目した。この選択の過程を分析することの重要性を示すため、どのように FIC が選択され、どのように語られるのかについて検討を行った。その結果、FIC の語りから、(1) 過度に反応内容に一致させていくパターン、(2) 反応内容がほとんど顧みられず、意識的に父親イメージが固定化されているパターン、(3) 反応内容を一つの手がかりとしながら、父親イメージを比較的柔軟に捉えているパターンの 3 つが得られた。

そこで、本研究の事例を一部取り上げながら、FIC 選択の過程を分析することの意義について示したい。ワンマンな父親像群の事例 B, C はともに IV カードを FIC として選択した。反応内容も「クマ」「巨人」「怪獣」など脅威のイメージを連想させるものであり、選択理由もネガティブな内容であった。従来行われてきた解釈では、この 2 事例について、「父親への嫌悪感、恐怖心が強く、否定的な父親イメージを抱いている」といった理解がなされると考えられる。

しかし、本研究において FIC 選択の過程を分析したところ、事例 B と C は質の異なる父親イメージを抱いている可能性が示唆された。事例 B はパターン (3) を示し、FIC の反応内容、そして選択理由の語りにおいて両価的な感情がうかがわれた。全体的にはネガティブな父親イメージとしてまとめられていたものの、幼少期における父親との良い思い出を語る中でポジティブな感情が表現されていた。岡本・上地 (1999) によると、青年期においてはそれまでの理想化された親のイメージが崩壊し、現実の親を批判しながら、心理的な依存からの離脱が進んでいくと考えられている。また、精神分析的な視点からは、青年期女性は、性的な成熟により異性愛的感情を自覚すると、父親への甘えを交えた愛情は危険な感情として排除され、反動形成的に今までとは反対の強い嫌悪感を抱くとされている (馬場, 1987)。これらの言及を踏まえる

と、青年期女性である事例Bは、その発達の過程で、父親に対する批判や嫌悪感が生じている可能性が推察された。一方で、事例Cはパターン(2)を示した。反応内容には触れられず、イメージが固定化されている可能性がうかがわれた。語りの検討により、父親からの愛情や関心を十分に向けられてこなかったことによる傷つきを抱えており、意識的にネガティブな父親イメージが形成されているものと推察された。父娘関係の研究においては、父親からの愛情を感じることが、自己の存在に肯定的な感情をもつための基盤となり(春日, 2000)、愛情にまつわる葛藤が自我同一性の障害になる可能性(辻井ら, 1992)が指摘されている。こうした示唆を踏まえると、事例Cにとって、内面の否定的な父親イメージに触れていくことは、自分の基盤を揺るがすような体験になりかねないと考えられる。そのため、選択理由においても、反応内容や自分の感情の語りは避け、行動面のみの言及しかできなかったのかもしれない。

以上より、FICの反応内容や端的な選択理由のみから解釈を行った場合には、同様の父親イメージ理解となる可能性がうかがわれた。本研究では選択過程の分析を行い、対象者の父親イメージに対する否定的感情は両者で異なる意味をもつことが理解された。選択過程の分析を通して得られたパターンは、対象者の父親イメージをより力動的に理解するにあたり、非常に重要であることが示唆された。ただし、今回は9事例のFIC選択過程を対象としており、一般化することは難しい。今後はサンプル数を増やすとともに、FIC選択の過程についてスコアリングも含めて詳細に検討していく必要があるだろう。また、選択中の内的な動きについて、今回は選択時間のみを取り上げて検討を行った。カードを選ぶ際の沈黙、発言、視線、表情なども重要な指標であり、今後はこうした要素についてもデータを収集し、今回得られた知見とあわせて検討していく必要があると考えられる。

最後に今後の展望について述べる。FIC選択について、Schachtel(1966)や馬場(2002)が指摘しているように、IVカード=父親イメージとして解釈を進めていくのは非常に危険が伴うと言える。そこで、本研究においては解釈仮説に限定せず、選択の過程に着目して質的に検討を行った。従来のロールシャッハ法の質的検討においては、継起分析など過程を重視した検討がなされてきたが、IC選択の解釈方法は、各臨床家に委ねられる部分が大きかったのではないだろうか。そのため、今後は本研究で見出された選択のパターンを精緻化し、FIC選択における解釈方法の一つとして明示することが求められるだろう。また、本研究においても、質問紙で捉えられた父親イメージ、FIC選択のパターンに大きな偏りなくIVカード選択された。FIC選択の解釈方法の検討を行った上で、再度IVカードの位置付けについて捉え直すことは、これまでのFIC解釈仮説研究に臨床的な視点をもたらすと考えられる。

## 文献一覧

馬場謙一(1987). 青年期の深層. 有斐閣.

馬場禮子(2002). 改訂ロールシャッハ法と精神分析—継起分析入門. 岩崎学術出版.

Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The psychoanalytic study of the child*, 22(1), 162-186.

Bochner, R. & Halpern, F. (1945). The clinical application of the Rorschach test. 2nd ed. New York: Grune & Stratton.

- 福井義一・三宅由晃・岡崎剛・森津誠・遠山敏・山下景子・岡田信吾 (2011). ロールシャッハ・テストの父親・母親図版解釈仮説の図版選択法による検討. 心理学研究, **82** (3), 249-256.
- 星野和実 (1993). 中年期女性の発達とロールシャッハ・テスト:不安を訴えた2事例の検討. 名古屋大学教育学部紀要, **40**, 159-173.
- 井原成男 (1983). イメージの家族内力動: ノーマルな児童のロールシャッハ・テストから見た家族関係. 長野大学紀要, **4** (3-4), 45-63.
- 神谷俊次・郭小蘭 (1995). 父娘関係, 父親像と娘からみた父親の魅力. アカデミア, **61**, 195-227.
- 春日由美 (2000). 日本における父娘関係研究の展望: 娘にとっての父親. 九州大学心理学研究, **1**, 157-171.
- 片口安史 (1980). 新・心理診断法: ロールシャッハ・テストの解説と研究. 金子書房.
- Meer, B., & Singer, J. L. (1950). A note on the "father" and "mother" cards in the Rorschach inkblots. *Journal of consulting psychology*, **14** (6), 482.
- 三浦克奈雄・柴原直樹 (2015). ロールシャッハ・テストの父親・母親図版解釈の再検討. 神戸医療福祉大学紀要, **16** (1), 105-115.
- 溝上慎一 (2011). 反抗期のない大学生 (特集反抗期の子どもと親). 教育と医学, **59** (5), 438-445.
- 村上英治 (1957). ロールシャッハ・テストにおける人間関係に関する研究 (1) - “父親カード” と “母親カード” の分析 - . 名古屋大学教養部紀要, **2**, 1-10.
- 西尾ゆう子 (2016). ロールシャッハ法からとらえた老年期女性のジェンダーイメージ. ロールシャッハ法研究, **20**, 32-41.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係. 教育心理学研究, **47** (2), 248-258.
- 小此木啓吾・馬場禮子 (1989). 精神力動論ーロールシャッハ解釈と自我心理学の統合. 金子書房.
- 小野寺敦子 (1984). 娘から見た父親の魅力. 心理学研究, **55** (5), 289-295.
- Rosen, E. (1951). Symbolic meanings in the Rorschach cards: A statistical study. *Journal of Clinical Psychology*, **7**, 239-244.
- Schachtel, E. G. (1966). Experimental Foundations of Rorschachs Test. *New York: Basic Books*. 空井健三・上芝功博訳 (1975). ロールシャッハ・テストの体験的基礎. みすず書房.
- 鈴木慶子・高橋靖恵 (2005). 青年期女子の女性性受容一質問紙法とロールシャッハ法による検討. 九州大学心理学研究, **6**, 281-293.
- 高橋雅春・北村依子 (1981). ロールシャッハ診断法 I. サイエンス社.
- 田中富士夫 (1984). ロールシャッハ・テストにおける父親・母親カード仮説の諸問題. 金沢大学文学部論集, 行動科学科篇, **4**, 1-11.
- 辻井正次・中島啓之 (1992). 非行少年の両親像と心理的特性 (II) - 両親像の再検討 - . 犯罪心理学研究, **30**, 50-51.

(臨床心理実践学講座 博士後期課程2回生)

(受稿 2017 年 8 月 30 日, 改稿 2017 年 11 月 20 日, 受理 2017 年 12 月 20 日)

## ロールシャッハ法における父親イメージカード選択過程の検討

—青年期女性の父親イメージに着目して—

石井 佳葉

ロールシャッハ法の父親イメージカード (FIC) 選択について、反応内容だけではなく、選択される過程に焦点を当てて検討を行った。青年期女性 175 名を対象として、意識的な父親イメージについて質問紙調査から捉えたところ、ワンマンな父親像、影の薄い父親像、優しく頼れる父親像の 3 つが得られた。そのうち、9 事例の FIC 選択について、選択されたカードの反応内容、選択時間、そして選択理由の語りの展開に沿って分析を行った。その結果、FIC 選択においては、(1) 選択に時間を要し、FIC の反応内容に過度に一致させていくパターン、(2) 反応内容がほとんど顧みられず、イメージが固定化されているパターン、(3) 反応内容を一つの手がかりとしながら、父親イメージを多面的に捉えているパターンの 3 つが見出された。従来は選択結果のみから父親イメージ理解が行われてきたが、本研究により、選択の過程を検討することの意義が示された。

## Selection Process about Father Image Card in Rorschach Method: Focusing on Adolescent Women's Father Image

ISHII Kayo

In the Rorschach method, people are usually asked to select Father Image Card (FIC). To understand the image from FIC, this study focuses on not only the card but also the selection process. First, 175 adolescent women were separated into three groups based on a questionnaire about the conscious father image: dictating image, forgettable image, kind and reliable image. Second, the responses of nine subjects in the process of selecting FIC were investigated. The process was divided into three parts, considering of the contents of FIC, time for selection, and the narrative for why they chose the card. As a result, three patterns were found: (1) taking more time to select FIC, and harmonizing father images with the contents of FIC; (2) ignoring of the contents on FIC, and having a stereotyped father image; (3) reporting various kinds of father image based on FIC. In previous research, father images were understood simply by the choice itself and the contents. If two people selected the same card and provided similar contents, their images were interpreted in the same way. Therefore, it was possible that the understanding was insufficient. This study suggested that analyzing the FIC selection process would allow the therapist to gain a deeper understanding of their clients.

**キーワード：** 父親イメージカード，ロールシャッハ法，青年期女性

**Keywords:** Father Image Card, Rorschach method, Adolescent women